

---

# 孤児のサーカス団へようこそ

結ぽんず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤児のサーカス団へようこそ

### 【Nコード】

N2363M

### 【作者名】

結ばんず

### 【あらすじ】

孤児のサーカス団長 エリクと、団員たちとの旅のお話。  
旅の中の事件や出来事で、団員たちの心の成長を描いています。

## プロローグ

僕はなんの為に生きてるんだろう、って思うときがある。  
生きている理由が欲しい。生きる為の糧が欲しい。

僕がただ、『死ぬのが怖い』だけで生きているのだとしたら、それこそ怖い。

もしそうで、そんな浅い理由で生を選んでいるなら、死に直面したときに生き残れない気がして。

生きる意味が死ぬのを恐れるだけなら、未練も執着も愛情も、何もないでしょ？

死にたくない僕は、だから、探す。欲する。  
生きている意味を。

エリク   トラックの荷台

「   リク？   エリクー！」

「おわっ！   はい！   えっな、なに！？」

寝ていた僕は、耳の傍から聞こえた大音響に身体が跳ね、飛び起きた。遅いと分かっていたいながらも、キンキンする耳を押さえる。寝起きから災難…。

「もー、やっと起きたー。遅い！」

右から文句を言っているのはシャルロット。小学校に入学する頃くらの歳で、腰まである金髪を二つ結びにしている。シャルロットの遠慮と理由の力ケラもない行為は歳相応だからと笑って許せるのであって、他の人にされたら殺意しかわかない気がする。

辺りを見渡すと、僕以外は全員起きていた。自分だけ寝ていたのかと恥ずかしくなったので話をそらすことにする。

「ごめんごめん。で、今どこ？」

ここは走行中のトラックの中。道がデコボコなのかトラックがボロボロなのかはさておき、時々振動で身体が浮く。

よくこんなところで熟睡できたなと自分を褒めたい所存であります。立ちながら寝れるんじゃないかと思っております。

座ったまま、身体を安定させるために斜め後ろの床に手をつくつと、ひんやりして気持ちよかつた。

「自分で見ればわかるだろ」

淡々と喋るのは、僕の一つ下、14歳思春期真つまただなか只中のカイ。無愛想の代名詞になれそうな彼はいつも仏頂面。なにが気に食わないんだかー。

「あ、そだねー」顔に笑顔を貼り付けて、金髪無愛想君の言うとおり自分で確かめる事にした。なんとなくてシャルロットの頭を撫でた後、立ち上がって窓へ向かう。

このトラックには手作りの窓がついている。夜真つ暗になるのをシャルロットが怖がるから、みんなでつけた。壁に穴をあけて、安全のため、ゴミの中から拾った棒を鉄格子がわりにつけただけの、お粗末なものだけど。シャルロットは、星が見えるだけでずいぶん怖がらなくなった。

前、その理由をどうしてと聞いた僕に、この子は「お星さまのどれかにはおとうさんとおかあさんがいるんだよー。だから安心なのー」と無垢な笑顔で答えてくれた。運命って残酷だなと、少し心が痛んだのを覚えてる。

そんなことを思った窓から、顔を乗り出す。

見えたのは、木、木、木…森以外のなにものでもない景色。地面は薄茶色の、こけたら痛そうなデコボコ一本道。進む先には国境がわりの堀が、無駄に高くただっ広く建っていた。距離からするに、後10分くらいでつく。

この堀を探していた。というか、どこでもいいから国を探していた。僕たちは孤児6人のサーカス団。運転手含め、7人。自分たちの旅の生活費と、孤児院に寄付するためのお金を稼ぐために、サーカスでお金を稼いでいる。

風の所為で顔が寒くなってきたので、引つ込めた。逆を向いて背中を壁に突け、ズルズルと座って欠伸を一つ。こんなに眠いのは僕だけかとみんなの顔を見渡すと、カイに欠伸がうつっていた。

ちなみにあの塀を見つけたのはディラン。彼は運転手で17歳。記憶の中、覚えてる範囲で一番最初の友達で、一番の理解者だ。

トラックにはシャルロットとカイ、ディランや僕以外に、シャルロットの双子の兄シャルムと、僕と同年の女の子エリイがいる。さつきも言ったがみんな親を亡くしている。

性格も心も、今のところ健全な僕たち。でも、過去を乗り越えたわけじゃないと思う。じゃあなんだろう？ 正しい表記の仕方が思いつかない。重い過去は、大人になるまで背負わない、ということかな。

だから、『まだ』僕たちは過去を直視せず、不明瞭な記憶と一緒に生きている。

「おい！ エリク！」

外からディランの声。

「あ、はい？」

もう一度、立ち上がってから窓から顔を出す。

運転席の窓から、ディランがこつちを見ていた。運転しながらのにすごいな…。

「もう少しで着くから準備しとけ」

「はいはい」

伝言を承った僕はすぐ顔を引つ込めて「みんな準備してー」もうすぐ降りる事を知らせた。

準備といっても、そんなにすることは無いのではと思う。いや、そんなにといても心の準備以外することは無いのでは…。

「うーむ…」

眉間に皺を寄せて唸ってみたら、みんなに怪訝な顔をされた。唸った理由はみんなに話す必要もなく、ただ『準備』のことを考えてただけ。笑ってごまかしたら、結果、もつと怪訝な顔をされた。

お勞しや、自分…。

## プロローグ（後書き）

超初心者が書いている小説です。楽しんでもらえたなら光栄です！  
…楽しんで読む内容なのかは、さておき…。  
読みにくいところも多々あると思いますが、これからもどうぞよろしくお願いします！

## 第一章 少年の思いと団員の消失

俺はいつでも、1人で孤独だった。誰かの為にと思い、なにかしたこともない。なんせ、俺の周りには誰もいないから。でも、1人のほうがいい。

大切なモノがないということは、失うものもないということ。なにもないほうが、守るべきものなどないほうが、楽だとは思わないか？今日も俺は盗みを犯す。望む望まないは関係ない。生きる為に誰かを不幸にするだけだ。

罪悪感なんて邪魔なだけ。大嫌いな過去でとつくに捨てた。そんな俺が生きている意味。それは

### 少年 路地裏

暗い路地裏。息を荒くして、俺はただ、ひたすらに走っている。

水溜りに足をつつこんで水しぶきがとんでも気にしない。ズボンの裾が汚れたって、顔にかかったって、ただただ走る。どうせ、前からボロ雑巾のようにくたびれていたズボンだから。

路地裏に入る前、トラックを見かけた。何人かの子供が荷台からでてきていた。荷台の中には、よく見えなかったがフラフープや綱があったと思う。サーカス団かなにかだろうか。

生きる為に行っていることが俺とは全く違い、あの子供たちは誰かを幸せにすることだってできる。

俺の手には林檎が一つ。ばあさんが営業する八百屋から盗んできたものだ。これが今日の食料。

親は、俺を置いてどこかに消えてしまった。まああんなヤツら親とも思っていないが。あいまいな記憶の中に残るのは、お前なんて消えればいいと無表情でつぶやいた父の顔。存在自体が、とても怖かった。あの頃は、自分がなぜ嫌われたのか必死になって考えていたな



…。

…また思い出してしまった。後ろを振り返って、誰も追いかけてこないことを確認すると、そのまま立ち止まって首を振る。あんな過去こそ消えてくれればいいのに。

右側の壁に寄りかかり座ると、膝に顔をうずめる。視界だけでもいいから、『現実』から離れたかった。

暗闇の中で、自分の呼吸音だけが聞こえる。

心地いい。でも何か足りない。何が足りないんだろう。考えても思いつかないから、考えない事にする。

強がりなのは自覚している。でも、正直なところを言うならば。

こんな生活、続けたくない。

しばらくそのままじっとした後、顔をあげて林檎をかじる。

泥まみれの手が握っているその林檎は、手と接する事で一緒に泥だらけになっていた。

## エリック トラックの近辺

入国手続きは簡単に終わった。

門番にサーカスをしたいんですがと言うと、笑顔で入国させてくれた。なんていい国と人なんだろう。

トラックで門をくぐった僕らは、すぐ近くの広場でトラックを止めた。

ディランは夜中も運転していたため、荷台で仮眠を。僕らサーカス団員は、公演前の夜ご飯の買出しに街へ出かけることにする。

「じゃっ、ゆつくり休んでてねー」すでに寝てしまっているディランにそう言ったあと、団員が全員降りた事を確認し、起こさないように配慮して静かにトラックの扉を閉めた。

「んで、夜ご飯なににするー？」

振り返りながらみんなに質問。

「カレー！ カレー！」

右手を挙げながらぴょんぴょんと跳ねるシャルロット。好物はカレーだ。

「んー… やっぱりするのかな…」

毎回こんな感じで意見を出すのがシャルロットしかいないため、夜ご飯は絶対にカレーになる。飽きはしない体質だから、大丈夫だけど。

「まあいいよね。はい、カレーで」

「やたー！ やたー！ やったーっ！」「わあっ」エリイの手を引いて一緒に回りだすシャルロット。

前かがみになりながらできつそうな体勢なのに、笑顔で付き合っただげるエリイは優しいなあなんて思ってみたり。というか、シャルロット喜びすぎだろー。毎回カレーだろー。

やった本人が目を回したので、喜びの舞はすぐ終了した。

「はいお金。カイとエリイは肉屋でお肉買ってきて」「はい」

回り終わって若干フラフラなエリイと無愛想カイはお金を受け取り、先に市場に出かけていった。

「さて、僕は野菜担当だよー」

双子のシャルロットとシャルムに、それぞれお金を配る。二人はまだお金を持たせないほうがいい年齢だし、買えるのはたまねぎ一つくらいの金額だが。

「さっさと行こー」

意気揚々と僕の手をひくのはシャルム。シャルロットは大事そうにお金を握っている。いつもシャルロットは、ものすごくお金を大事にしているんだ。なぜかは知らないけど。

さすがシャルロットと双子だと思えるほど元気のありすぎるシャルムは、お金をポケットに入れてスキップで歩き出す。右手は僕の手、左手はシャルロットの手で塞がっているから。

身長差の所為でぎこちないスキップをしながら街へ着くと、混んでいた。

手を離さないようにねと言って人ごみの中に入る。

何人もの人に肩をぶつけた。いろんなにおいが鼻につく。香水やタバコくさかった。

しかめっ面になるのを抑え、なんとか八百屋に着いた。

「さてと…、さあ買い始めようか」

隣のシャルムを見ると、不安そうな顔をしていた。どうしたんだろう…。

「ね、ねえエリク…。シャルロットが…」

そう言われて初めて、シャルムの向こう側に目をやる。

シャルムと手をつないでいたはずのシャルロットが、いなかった。

「うそ…」急いで辺りを見渡す。目の前に現れるのは、僕よりも背の高い大人たちばかり。

…いない、いない！

こんなに不安で焦ったのはいつぶりだろう。バクバクと鼓動がはやくなる。唾がうまく飲み込めない。

人混みに目を向けたまま、シャルムの手を強く握る。離さないように、しっかりと。

「シャルロットを探すよ」

今の僕に出来る、唯一のことだった。

## 第一章 少年の思いと団員の消失（後書き）

今回で二度目の投稿です。全体的に話が暗いので、どうしたものかと悩んでみたり。

これから暗い話が続くと思いますが、飽きずにまた読んでくれたら幸いです！

## 第二章 市場＋団員＋少年＝林檎の落下

わたしの生きている意味は、みんなを助けるため。わたしがこんなこと言えるもんじゃないかもしれないけど…。

親の存在は知らないけど、楽しい毎日を送れているわたしだから。それに団員<sup>なかま</sup>たちも。

悲しいことが、立ち直れそうにないことが、現実起きてしまっても。それでも、乗り越える事ができるはず。今は無理でも、大人になつたらちゃんと背負えるはず。

それを、私たちみたいな子どもに伝えたい。親を亡くした子どもたちにも。

だから生きてるの。今はまだ、これくらいしかできないから。

### エリイ 市場の肉屋

カイと一緒に、お肉屋さんに着いた。エリクたちが向かったほうの市場はかなり混んでいたから、はぐれてないか心配だなあ。

「ねえ、お肉買うのに二人もいらなと思うわない？」

苦笑しながらそんなことをふと思う。

「だな」

相変わらずのポーカーフェイスなカイ。これ、代名詞にできるかも。

「うーん…」

どのお肉を買うか悩むフリをして、カレーに追加させる材料を考える。いや、カレーにいれなくてもいいのか。…もういいや。自分の好物にしちゃえ。

「なら、わたしは果物屋さんで林檎でも買って来るねー」

「おう」

わたしと目もあわせず、お肉選びに夢中なポーカーフェイス君。

「じゃあまたー」

半回転をして、道にそった長い市場を眺める。果物屋さんはどこだろう。

自分の目線で見ると、果物屋さんは右にあった。エリクたちが歩いていった野菜屋さんはもつと右。

右に歩いていくにつれ人数が増す。

あ、あれ…？ 遠くにシャルロットが見えた。でも隣にはエリクもシャルムもいない。別人？

訝しみながらも、早歩きでその子を追う。

その子の背中を遠い距離から追っていると、その子は裏路地に入っ  
ていつてしまった。きつと別人だったんだろう。

いらない心配をしたなあなんてホツとする。

場所移動をしたため、果物屋さんはすぐそばだった。

果物屋さんの店主みたいな人が店員と話し込んでいる。気付かれな  
いように耳を傾けながら、林檎を探す。

「またあのガキだろ？ アイツ、いつになったらこりるんだか」

「ですよ…」

店主と店員の会話。顔も不機嫌そうな店主は、きつと怒ってる。店  
員は呆れてるご様子。

林檎はすぐそばにあった。市場の続く横一本道の、一番近いところ  
に。つまり林檎が乗ってる台は、店の外にある。

「万引きの常習犯らしいな。他の店も言ってたぞ」

「そうみたいです。うちも二回目ですしね…」

へえ。この国には万引きの常習犯がいるんだ…。大変そうね。

他人林檎を2つとって、話している店員に持っていく。

「これくださいーい」「あ、はいー」お金を渡す。

林檎を紙袋にいれたあと、店主たちに背を向けてお店の外へ向かう。

「アイツもあの客と同じくらいの歳だったよな」

「はい」

アイツが指すのはきつと万引き常習犯。あの客とはわたしのことな

んだろう。

…予想外だった。万引きをしていたのが子供だったなんて。市場の道を歩きながら、そう思う。

私、この子の万引きする理由が分かる気がする。きっと、生きる為なんだ。そうじゃなければ、万引きなんてしないもの。大人の欲に塗れた行為とは全然違う。

同じ親がない苦しみを味わったのに、こんなに生活の仕方が違うとは…。

その子に、会ってみたくなった。

「エ、エリイ！」

誰かが私を呼んだ。下を向いて歩いていた足を止め、目線を上げる。人混みの中、手を振って私に向かってくるエリクがいた。

「え、どうしたの…？」

私の方からも近づき、声をかける。だってエリク、息が荒いし焦ってるし。いつもの感じじゃない。

「実はね…、シャルロットが…」

## エリク 市場の道

シャルロットが消えてから、町中を探し回った。でも、いない…。どこにいるんだ…？

人混みの中にエリイを見つけ、急いで駆け寄る。

「エ、エリイ！」

「どうしたの…？」

僕の顔を見て、エリイは心配そうな顔をした。僕の不安は顔にまででているんだろう…。

「実はね…、シャルロットが消えた…」

完全に自分の不注意の所為だった。

僕はこれほどにも無いくらい焦っている。ただの迷子だったらそれでいい。だけど、他のほかの理由だってある。子どもをさらう大人

もいるかもしれないんだ。

「……。ねえ、見間違いだったのかもしれないけど、あっちの裏路地にシャルロット似の子どもが入って行ったのを見たの」

野菜屋さんの向かい側、暗い路地を指してエリイは言った。

大きな手がかりだ。

「よし、行ってみよう!」「うん!」

僕らは人混みの中を走って、路地に向かった。

## 少年 裏路地

こいつは誰だ?

俺の目の前にいる、この子どもはなんなんだろう。体育座りをして  
いる俺をみている1人の少女。

「……………おい、お」「ねえ、お兄ちゃん」

俺から話しかける前に、俺の顔をまじまじと見つめている子どもが  
話しかけてきた。見た目は5、6歳だろうか。さっきから二人で見  
詰め合っている。

「なんだ?」

いぶかしみながら聞く。

「その林檎、どこで売ってた?」

その質問に拍子抜けした。真面目な顔で俺を見るもんだから、もっ  
と大事なことを言われるのかと思ったのに。大事なことと言っても  
思いつかないが。

「市場にあっただろ。この路地の近くにあったの気付かなかったの  
か?」

「うん」

また拍子抜けした。

まあ歳相応として許せるかもしれないが…。それにしてもこれぐら  
いの歳の子どもが考える事は予測がつかない。

でも少し、可愛いなと思った。俺に兄弟がいたらこんな感じなのか



と想像してしまった。

そんな時、ふと、視界の端に人影が見えた。  
しかもこっちに向かって走っている。

「え……？」

なにも気付いていない子どもの手をとって、林檎を投げ捨て、人影と反対方向に全速力で走る。

人影の大きさからするに、俺たちを追っているのは大人だった。

果物屋の？ ……いいや違う。人数が多かった。5人はいただろう。

じゃあなんなんだ！？

焦る頭で考える。あいつらは誰だ！！

「あ……」

そんな思考も止まってしまった。足もとまる。

目の前には、黒い服を着た男が5人ほどいた。

挟み撃ちされた。

近づく大人たちになんの抵抗もすることが出来ず、口を覆うハンカチの臭いで、俺の視界は闇になった。

## 第二章 市場＋団員＋少年＝林檎の落下（後書き）

はい、こんにちは

投稿遅れてごめんなさいっ…！！

読んでいただき感謝です！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2363m/>

---

孤児のサーカス団へようこそ

2010年10月11日20時51分発行